

論文題目：文法教育における母語転移の扱い方-中国語話者のアスペクト・テンスの習得における発達パターンに着目して-

文法教育は言語習得において重要な課題である。成人が第二言語を獲得する際に、第一言語の獲得と同様にインプットに頼るだけでは習得が早く進まない原因は、母語転移を受けているためだと考えている人が多い。一方で、近年特定母語話者のための研究が増え、母語を積極的に教育現場に取り入れることによって、学習者の習得に直接役立つ効率的な学習が期待できると考えられている（渋谷 2001;井上 2005;張 2011;庵 2017 など）。本研究では一度学習したが自然習得に頼ってもなかなか習得に至らない文法項目には明示的な文法指導が必要であるという立場に立ち、そして、学習者の母語転移を習得過程における大きな要因の一つとして取り上げ、学習者の習得過程における母語転移の可能性を見直し、それが文法習得に与える影響から、従来の母語転移の考察を目指す対照研究や習得研究の問題点を取り出し、母語を活かした日本語教育文法研究を行う。

母語転移を活かす教育文法を考える際に、課題として取り上げなければならないのは、母語転移を正確に捉えるということである。中間言語研究の考えから見ると、学習者の言語体系は母語から目標言語に近づいていくため、母語転移が学習者に与える影響は目標言語の習得により動的に変化していると考えられる。このため、習得過程における母語転移の働き方を把握するために、学習者の中間言語体系を解明することも重要であると考えられる。さらに考えると、習得過程における学習者の困難点にも対応できるような文法教育を考えることも必要であると言える。そのため、本論文では第1章で問題提起をし、第2章で文法教育における課題と母語転移の可能性を検討し、本研究の課題を以下のように設定した。

- 〈1〉学習者の習得過程における中間言語体系と発達パターンを把握する。
- 〈2〉特定母語話者の母語転移の働き方を解明する。
- 〈3〉母語を生かし、効率的な文法習得のための文法記述研究を行う。

また、本研究では母語を利用可能な有力な既習知識として応用し、それを最大限に活かすことがより効率的であると考えているため、母語転移を最大限に生かした教育文法を主張している。このため、本研究が考察対象とする母語転移は、単に言語間の文法形式の対応関係だけではなく、以下の通りである。

(1)<1>母語の文法形式による転移

<2>母語の発想・論理などの感覚による転移

<3>[<1>/<2>]+他言語（学習した L3 や目標言語）の知識を融合した転移

つまり、母語転移には文法形式による転移と明示的ではないが母語の発想や理論による転移という 2 つの側面があると考えられるが、さらに習得過程で目標言語の知識が既習の他言語の知識と融合して働くことも考えられる。<3>は独自の規則と一般的に扱われているため、これまでの母語転移の考察に含まれていないと考えられる。本論文では、このように母語転移の起こりうる場合の全般を取り扱い、あらゆる母語転移の側面を観察する。

そのため、第 2 章では母語転移を考察する方法を提案した。

従来の言語形式に注目する対照研究や学習者の習得状況に注目する習得研究では、あらゆる母語転移を確実に観察することはできない。それは、対照研究では習得過程における母語転移の働き方が考察できない可能性があるのに対して、習得研究だけでは母語転移の具体的な働き方を把握できないからである。すなわち、学習者の習得過程に母語転移が対照研究の結果通りに反映するわけではないため、一見母語転移のように見えるが実は独自の規則か言語内の転移による結果で、もしくは、一見母語転移ではない誤用でも実は習得過程において母語転移が一部働いた結果である、といった可能性がある。そのため、本研究では新たな考察方法を第 2 章で提案した。それは、言語間の文法形式の対応関係と習得研究から各段階や環境の学習者が実際に産出した誤用を統合的に考えることによって、学習者の習得過程における発達パターンを予測する対照研究と、文法習得に多用されている文法テストに学習者の内省も考察できるような FI を入れる習得研究を、組み合わせて習得過程における母語転移の働き方を解明する方法である。

以上の問題意識を持ち、本論文では中国語話者のアスペクト・テンスの習得という課題を扱い、対照研究、習得研究、文法記述研究を経て研究してゆく。そして、今回扱う対象項目は過去テンスの「進行中」と現在テンスの「結果残存」という先行研究において同じ段階で習得され、誤用としてタが多用される 2 用法を扱った。

第 3 章では、これまでのアスペクトとテンスにおける日中対照研究は言語形式の対応関係に止まり、中国語のテンスの文法カテゴリーがないという特徴が考察に入れられておらず、対照研究が正確に行われていないという問題を示し、新たに対照研究を行った。第 3 章では日中のテンス表現を比較することで、アスペクト・テンス表現におけるテンスの表し方が異なり、日本語は義務的テンスをつけて表現するのに対して、中国語

ではより任意的である傾向が見られた。それにより、先行する習得研究で挙げられたあらゆる誤用を考察することによって、先行研究で多く挙げられている母語転移のタは学習の前段階で出現する誤用であり、習熟度が上がるについてテイル・テイタの誤用も出現し、それらは母語転移が働いた結果によって出された誤用であると分かった。さらに、中国語話者のテンスに対する認識こそが最終的に正解にたどり着くためのポイントであると推測し、中国語話者の2用法における発達段階を以下のように予測した。

(2) 過去テンスの「進行中」の発達段階に対する予測

V(動作) アスペクト(進行中) + テンス(過去) = 過去の進行中

a.		てい	+	-た	=ていた	○	
b.		てい		-た	=ている	×	
c.		てい		-る	=ている	×	
d.	た				=た	×	
e.	る				=る	×	

(3) V(変化) + アスペクト(状態) + テンス(現在) = 現在の結果残存

a.		てい	+	-る	=ている	○	
b.	た +	てい			=ていた	×	
c.	た				=た	×	
d.	る				=る	×	

このように、(2)(3)を本研究の仮説として、それを次の第4章と第5章の習得研究により検証する。

まず、第4章では中国語話者の習得が止まっているように見えている中級段階の中国語話者7名を対象に、文法テストにFIを入れる調査法を用いた。質的な観察により第3章で考察されたことと母語転移との関連を探るためである。その結果、先行する習得研究では検討されていないテイルとテイタも観察され、それは従来の対照研究からすると母語転移とは関係ないように見えているが、本研究の対照研究と本章のFIから、実は母語の転移によるものだと分かった。全体的に、中国語話者のアスペクトの習得は進んでいるが、母語の感覚を用いて日本語のテンスを正しく理解できないという影響でテイル形全体の習得が遅くなったということが見られた。そして、先行研究ではアスペクトマーカーを用いて学習者の習得状況を解説しているが、実際に中級段階の学習者はアスペクトマーカーを根拠に日本語のテイル形の使用を考えていることが少なく、独自規則が多く存在しているが観察された。さらに、崔(2009)の結論とは異なり、過去テンスにおける「進

行中」は現在テンスにおける「結果残存」より早い段階で習得される可能性が観察された。

次の第5章では、第4章で観察されたことは一般化できるのか、それは学習段階と学習環境によってどう異なるかを解明するために、学習段階別、環境別の中国語話者を扱い、第4章と同じような方法で調査を行った。さらに、母語転移をより深く探るために、第3章の考察結果と第4章の習得研究から母語転移の要因を細かく設定し、母語転移の働きによる異なる傾向を考察した。その結果、各学習段階や学習環境の中国語話者における母語転移の働き方を確実に捉え、本研究の仮説を検証した。そして、中間言語が発達している過程において母語転移と独自の規則が同時に働いているが、母語の正の転移を受けていても独自規則の負の影響で誤用になる場合と、逆に母語転移に頼らない場合に独自の規則を経由して正用になる場合が観察された。さらに、文法形式上では類似性を捉えなくても母語の発想を経由して理解できることも観察されたが、異なる学習段階や学習環境の中国語話者は自分で気づいた発想による類似性に対する処理の仕方が異なることが見えてきた。全体的に見ると、他を母語とする学習者と比べると、中国語話者の習得が特に困難である理由を新たに解明し、それは学習段階が上がってもテンスの影響でなかなか正解に辿りつかないことの影響も受けているからであると分かった。このように、本研究では中国語話者の習得実態と習得上における困難点をより確実に把握し、母語を最大限に活かした日本語教育文法の記述案のリソース提供をすることができた。

第6章では、母語を最大限に活かした日本語教育文法のための文法記述研究を行った。それが一般の学習者向け文法記述と異なるのは、母語に頼ることができるため、母語転移を活かした記述はただの情報提供だけでなく、それに学習者自身の力で確実に判断できる基準を加えることにより、直接産出につながる効率的な文法指導ができると、母語を活かした教育文法の効率性を明らかにした。そして、実際に中国語話者の困難点と母語転移を生かした文法記述を実現し、学習過程に出現する誤用にも対応できるような試案を作成した。

最後に、第7章では本研究のまとめと意義を述べた。本研究の最も大きな意義は、学習者の習得実態と母語転移を内面から把握できる調査法を提案したことである。文法テストは学習者の言語能力やメタ言語能力を量的に測る調査法であるのに対して、FIは学習者の主観的な意識により内面的な規則を質的に解明できる調査法である。このことから、文法テストとFIは相補的に学習者の中間言語の実態をより確実に把握するのに有効な調査法であることが本研究でも検証された。そして、アスペクト・テンスの日中対応関係を正確に捉え、中国語話者は習得上における困難点を新たに解明し、これは中国語話者向けの文法教育においても大変意義のあることだと考えられる。さらに、中国語話者のアスペクト・テンスの習得段階に対する認識を見直し、過去テンスの「進行中」は現在テンスの

「結果残存」より習得が早いことを明らかにした。最後に文法教育における母語転移の具体的な扱い方を検討し、母語を最大限に生かした日本語教育文法の考えを実現した。今後も、このような問題意識を持ち、特定母語話者のための文法教育に貢献していきたい。